

となりにいるよ

2020.04
Vol.31

※広報誌の名称が「ゆうりんだより」から「となりにいるよ」に変更になりました。

笑顔

常務理事 児玉 克己

先日、弁護士より一本の電話が入り、来て欲しいとのこと。弁護士との接点は皆無に等しい日々の生活。「それでも僕はやってない」の世界に引きずり込まれたのかと思いつつ、弁護士事務所を訪ねた。そこでの話は高齢の父親がしうがいを持ったご子息と生活をされており、そのご子息の今後の生活設計を手伝ってほしいとの内容であった。父親の相談と本人の状態把握のために後日ご自宅へ伺った。

家庭の状況やご子息の状態等を聞き、昼食と一緒に摂る事に。「この子はビールが好きなんです」とビールを注文し、出されたビールを笑顔で美味しそうに呑んでるご子息を見ながら父親はこの子を施設に入れたくはない、笑顔で暮らせる環境を作りたい旨の話をされた。

帰り道、ご子息の笑顔を思い出しながら、しうがい者施設、高齢者施設、児童施設を生業としてきた今迄の自分の仕事を振り返った。

しうがい者、高齢者の生活を施設生活、集団生活だと彼らの日々大切な生活を踏みにじってきたのではあるまいか。蟬と称して子どもたちに窮屈な生活を強いているのではあるまいか、職員にとって生きがいを、働きのがいを感じられ、嘘や偽りの無い職場になっているのだろうか。笑顔が素敵な生活の場を創造してきただろうか。

ひとりひとりを大切にすることとは何なのかを問い続けなさいと、笑顔の向こうでご子息が語りかけている。

ふれあいセンターおおだか



『ふれあいセンターおおだか』が
地域子育て支援拠点事業として新たにオープンします



ご挨拶

センター長 梅村 麻美子

平成22年に「なごやつどのの広場事業」としてスタートし、多くの地域の親子に育ちあいの場を提供し、その子育てを見守ってきた、ふれあいセンターおおだかですが、広場事業としては終了し、令和2年度4月より新たに拠点事業として再スタートすることとなりました。

緑区の中でも特に大高学区は、若い世代の転入も多く、見知らぬ土地での初めての子育てに戸惑うお母さんたちを当センターは精一杯温かく受け止めて、支え、共に子どもの成長を喜び、多くの親子の身近で温かな拠り所として親しまれてきました。

地域子育て支援拠点事業となりまして、お母さんに寄り添って支えたいというふれあいセンターの精神は変わりません。新たに2名のスタッフを増員し、今まで以上にパワーアップできるようスタッフ一同励んでまいります。

また、併設する乳児院、児童養護施設には、看護師、心理士、栄養士等の専門職も常駐しておりますので、ご相談のある方は遠慮なくお声を掛けて下さい。

- ・利用は、火曜日から土曜日の9時から14時の間です。(木曜日は8時半～13時半)
- ・3歳までのお子さんと保護者の方が利用できます。
- ・利用料は無料です。
- ・駐車場あります。



今年の冬も毎年恒例のスキー・スノボ、そり遊びに行ってきました。
「もっと滑りたい!」という中高生の声に
応えて、今年は中高生のみですが、お泊まりもしてきました。
去年と比べて上達した姿や、「来年はスノボやる!」と向上心溢れるたくましい姿を見ることができ、子ども達の成長を嬉しく思います。



おせち料理どうぞ召し上がれ



年末年始には、お餅つきやしめ縄作りをして
お正月を迎える準備をしました。
小さい子も職員に支えられながら頑張ってお餅をついていました。
お正月は、こたつでのんびり団楽したり、
卒院生もみんなが集まってお正月ならではの
ご飯を食べたり、楽しく穏やかに過ごしました。
2020年もみんなが健康に過ごせますように。



春にむけて、大根と人参を植えました。
早く芽が出ないかな〜♪



暖かくなると半袖で過ごす子も増えてきます。

お掃除、お洗濯、お料理、お買い物。
 家庭では当たり前に行われていることを、
 子どもと一緒にやろう！と目標にしてみました。
 掃除機を持って「ワタシがお掃除したよ！」
 とキラキラの笑顔。
 「ボクが畳む！」とお洗濯のお手伝い。
 スーパーで赤ちゃんのミルクを買ってきて、
 「いっぱい飲んでねー！」と2歳さん。
 職員と一緒に包丁を持って
 「おいしくなあれ」とお料理。
 「これがいいなあ、こっちはいいなあ」と
 お菓子売り場で悩む子。
 子ども達とともに、日常の小さな幸せを
 たくさん経験できました。



きょうわ



自立援助ホームの子どもたちは、生活の中で不満・苛立ちが募っても、発散する場所や方法がわからず苦しんでしまうことが多いと感じています。

そんな子どもたちにもいつもどう声を掛けたいのか、どういったことを求めているのか常に考えています。先日アフターの子から「きょうわに来る子たちは自立支援してほしくてたんじやなくて、ただ話を聞いてほしくて来たんだと思う。皆が皆そうじゃなくても大抵はそうだと思う。それに、大人を信用していかない子たちだし大人に自分から話に行くことは難しいから大人から来てくれるのを待ってると思う。」と言われたのは印象的でした。

子どものも不安というのは漠然とした抽象的なものであることが多く、具体的に何がわからないから不安・何に対しての不安なのかを理解することが難しい。それを理解するため、日ごろから子どもとの何気ない日常会話の中から価値観・思考の癖などを感じ取り、職員が気持ちの代弁・子どもの喜怒哀楽の感情に寄り

添い続けることを繰り返していく中で自分の感情を理解し始めるのではないかと思います。そうはいっても過酷な環境の中で生きてきた子どもたち。逃げの行動に走る時があってもそれは今までの人生の中でそうしない生き方とこれなかったという生い立ちが影響していることもある。わかっていても行動が伴わない、そんなときでも追い込んだりせず、子ども自身が決定できることが必要だと思います。必ずしも成功することを選ぶことが正しい選択ではなく、人のせいにせず自分の責任で選んだことだから最後まで責任もって行動することができれば自立に繋がっていくのではないかと思います。また子どもたちの気持ちに共感することも大切ですが、それ以上に否定しないことを意識しています。自分と違う生い立ちを生きてきた子たちに自分が思い描く正解を押し付けず、間違っていたり遠回りをする選択をしたりする時でも「そういった考え方もあるよね」と肯定しています。

ゆうりんの理念の中にある「自分を大切にし、困難に立ち向かう勇氣を持った子ども」という言葉の通り、失敗するかもしれないからやらないではなく、失敗してもいいから一回やってみよう、駄目な時・わからない時は職員に相談しようという気持ちを持ってもらえるよう、職員一丸となって日々支援をしています。

かえで



かえででは、今年の冬も毎年恒例となった駒ヶ根高原スキー場へ行きました。今年は個人の予定や怪我により不参加、見学の子もいたのが少し寂しくもありますが、参加できた子はレッスンも受け、積極的に取り組む姿がみられました。初めてリフトに挑戦する子もあり、最初は怖がりながら、何度も転びながら、それでも何度も挑戦する姿が印象的でした。スキーの経験が少ない職員も、子どもと互いにアドバイスし励ました。年に1回の行事ながら、「去年はこうだったよね。」と思いを話してみたり、去年と比べて少しだけ上達していたりと、毎年成長がみられることを嬉しく感じます。

3学期からは、コロナウィルスの影響による休校がありました。突然の事に、子どもも職員もみんな戸惑いました。はじめは「学校が休みだあ!」と喜んでいた子もいましたが、外出もままならず制限の多い状況には辛いものがありました。今の学年ももう少しで終わってしまうという時期でもあったので尚更、「学校みんなに会いたい!」「部活に行きたい!」と、学校を恋しく思う気持ち強くあつたようです。

新学期には今までの日常が戻り、1日でも早く子どもたちが笑顔で元気に登校できる毎日が戻ってくることを祈るばかりです。

厨房



3月末に、卒院や入学・進級を祝う恒例の“大きくなったね会”を開催しました。2019年度は、新型コロナウイルスにより行事の規模を縮小する流れとなつてしまい、例年使用しているふれあいセンターではなく、子どもたちが生活している小舎での食事となりました。

メニューは、卒院・進級する子どもたちのリクエストをもとに栄養士が考えました。今回は、手作りピザ・手巻き寿司・ローストビーフ・唐揚げ・ポテトなどが並びました。特に、手巻き寿司は初めて取り入れ、アットホームな雰囲気ワイワイ作って楽しむことができました。子どもたちもテーブルいっぱい料理に大喜びで、その姿を見るたびにやりがいを感じています。

これからも、一緒に食を楽しむながら子どもたちの成長を見守っていききたいと思います。



食育で子どもに伝える、食の大切さと楽しさ

ほだか保育士 髪口 愛莉

ほだかではここ数年、食育に力を入れ、子どもたちの「食」への興味関心を高めていこうと取り組んでいます。施設では、家庭に比べて食材を購入しに行ったり調理姿を見たりする機会が少ないため、乳幼児期に様々な形で「食」に触れることができるように試行錯誤しています。



ほだかでの主な取り組みとして、ユニットのキッチンを活用しての食事作りやおやつ作りがあります。朝食・昼食作りがそれぞれ週1回程度、おやつ作りが月に10回前後実施されています。職員がキッチンで調理中、お部屋で遊んでいる子どもは匂いを嗅ぎつけてつまみ食いをしてきたり、月齢が高い子どもは自ら「お手伝い



したい」と言ってキッチンに立つこともあります。この取り組みを続けていくことで、職員がキッチンに立ち調理する姿が子どもたちにとって自然な光景になりつつあります。

他にも食育の一環としてプランターを使用して野菜や果物の栽培も行っています。種や苗を植えるところから、収穫して食べるところまで子どもたちと一緒にいきます。収穫したものをその場で食べたり、さつと茹でてから食べたりすることが子どもにとっては大きな楽しみとなっており、自分で育てて収穫したものは、野菜であつても普段よりもよく食べてくれる子どもがたくさんいると感じています。

このような食育の取り組みを通して、子どもたちは調理の様子を目にする機会が増え、遊びにも発展されています。プレイルームのおままごとコーナーにはフライパンやお鍋、お玉や泡



だて器といった調理器具が揃い、子どもたちはそれぞれ思い思いに調理を楽しんでいます。おままごとではお椀に汁が入っていると見立てて、「あちちだよ、フーフー」と言いながら冷まそうとする姿があり、ユニットでの調理に力を入れ始めて、出来立ての熱々の物を食べる経験によるものだと感じました。他にも卵をシンクの角に当てて割ろうとする姿などを見ると、実際に教えたわけではないのに自然と理解できているというのは、日ごろの食育の成果であると感じています。

ご飯は作られて出てくるのが当たり前という認識にならないよう、食育を通して子どもたちに伝えていけたら良いと思います。今後子ども職員ともに楽しめる食育を続けていきたいです。

職員紹介



きょうわケアワーカー 山本百合子

Q なぜ中央有鄰学院で働くと思ったのですか。

以前は福祉とは関係のない仕事をしていましたが、人の役に立つ仕事がしたいと思い、社会人から福祉系の学校に入り直しました。その学校から資格取得のために実習させていただいた施設が、中央有鄰学院でした。子どもたちと丁寧に向き合い、子どもの育ちを考える養育や工夫を組織として行っているところがとてもいいなと思い、ここで働きたいと思いました。

Q 働く上で心掛けていることは何ですか。

自立援助ホームは法人の中でも高齢の児童を支援をする施設です。尚且つ支援できる期間は1〜3年程度。思春期真っ只中できょうわに入所し、大人なんか信じられないといった状態の子も多く、何ができるのかと思うこともしばしば。理想の自立像（正社員で働く、高卒資格を取る、一人暮らしをする、誰ともコミュニケーションをとれるようになるなど）を押し付けないことを大切にしています。きょうわの目的に沿

いつつ、子どもがどうしたいかをできるだけ尊重したいと思っています。また、ケースにもよりますが、子どもに色々な経験をしてほしいので、なるべく子ども自身のことは職員が一方的にやってあげるのではなく、子どもと一緒にやるように心がけています。区役所の手続きや買物などは、なるべく一緒に行くようにして、子どもにたくさん経験してもらうようにしています。

また、きょうわの食事担当としてメニューを作るので、食事はなるべく美味しいもの、子どもが好きなものを出せるように心がけています。きょうわの食事は現場の職員が作るので、子どもの希望にそった食事を作る、季節の食事を出す、お誕生日のケーキを作るなど、子どもとの重要なコミュニケーションツールでもあると考え大事にしています。

Q 休みの日は何をしていますか。

猫（オス、1歳未満、雑種のキジトラ猫）を飼っているので、家で過ごすことが多いです。家の中で映画を観たり、料理をしたり、お酒を飲んだり、猫と遊んだりして1日のんびり過ごします。たまに友達とご飯に行ったりカフェに行ったりします。また、男子バレーが好きなのでシーズン中はVリーグ観戦にも行きました。

Q にとっておきのエピソードを教えてください。

担当の子どもが仕事で迷惑をかけ、職員が胃を痛めながら子どもの職場へ謝罪へ行くこともしばしば。し

かし、子どもが迷惑をかけたにも関わらず、職場の方から「辞めた後の今後のAちゃん心配です。」「良く働いてくれますよ。いい子ですよ」「頼りにしているんです」と言っていたことがありました。子どもたちを思っていただけ人情のある雇い主さんがまだまだたくさんいらっしゃるんだと感動しました。感謝しても感謝しきれません。

Q 今後の目標を教えてください。

その子らしい人生を送れるような支援をしていきたいです。自立援助ホームで子どもにどんなことができるかまだまだ手探り状態ですが、「ホームに入所して意味はあったな」と子ども達が感じてくれるような場所にしたいです。また、自立援助ホームはまだまだ知られていない施設なので、たくさんの人に自立援助ホームを知ってもらえるように発信していきたいです。



「支援おらがみ」が「つぎ」もつた

令和元年9月1日から令和2年3月31日までに、寄贈・招待・ボランティア活動にご協力いただきました方々のご紹介をさせていただきます。紙面の都合上内容は省略させていただきます。(順不同・敬称略) 記載されていない方がございましたらご容赦下さい。

【個人】

佐久間信男 谷本美枝子 山口ミツノ 加藤舞
加藤幸男 深谷まみ 西尾あさみ 久野すみ子
山口和子 小尾仁美 道山朋子 鶴見利雄
宇都耕七 粕谷濱夫 山口保 飯島将司
早川富雄 近藤加代子 武藤理奈 瀬川卓也
川瀬喜世美 服部美也子 阪野文明 吉長敦子
浜島四郎 米山智明 福元裕也 名波容子
大石あゆみ 近藤晴代 松井考次 長江真克
成田浩久・千晶 近藤計太郎 廣田壮之輔
林勝博 福原亜也美 中嶋洋 多田美和 匿名
井手きよ子 松山信 森健治郎 服部みどり
秋元浩之 門一徹 松田佑加 石井祐治
森政樹 近藤幸江 河西ヒロ子 河西静則
片岡志保 後藤節子 水野太久蔵 深川静則
山口裕 鈴木弘茂 伊藤壽重 木下福郎
宗吉美由起 小坂直樹 新留好美 堀川道子
船木敏子 杉浦孝一 柳谷真智子 後藤雪江
服部彰 野野芳恵 山田佐智子 丸田優子
真木芳子 鈴木享 吉澤とみ子 安田訓明
仲野禮子 朝倉絹代 近藤光男 大川トヨ子
一杉治夫 坂井民子 長江和子 長江謙二
小川康元 斎藤礼子 持橋いくよ 川辺清次
紙屋祝子 中島光利 山口実 蜂須賀八郎
藤川尚士 大原誠章 毛受小夜子 佐伯誠
松永勲 朝倉夏雄・建子 永谷康信 柴橋佳幸
畔柳まどか 寺尾法子 浅井千穂 堀尾麻友
花田恵美 佐々木美和 ジェイムス・ヘイブンス
山岸せい子 水上脩 牧真吉 大友滋 梶野弘



【団体】

日本児童養護施設財団全国児童養護施設総合寄付サイト運営事務局 中部善意銀行 (株)ひしわ
全国シヤンメリー協同組合 オサムファーム
オールドリバー(株) 日本鏡餅組合事務局
ライフサポート仁科 日本ベビーカー工業(株)
西区役所地域力推進室 ナガサキ工業(株)
コカ・コーラボラテクノロジージャパン(株) ホウトウ
名古屋食肉三水会協同組合 (株)大野加工流通
グリーン大高クラブ 光ネットワーク協同組合
(株)ゆうちょ銀行 (株)NIPPO 中部支社
(株)フジトランスコーポレーション (株)イトウ
子どもハートクラブ ホテルメルパルク
緑区社会福祉協議会 奥田モータース
(株)オーアンドケー (株)東芝中部支社 西浦会
(株)日本教文社 セブンイレブン名古屋大高南店
読売新聞社世界の野球グローバル支援プロジェクト事務局 中部アニマルセラピー協会
グループエスカラデークレーラインサービス
緑区地域女性団体連絡協議会 太子学区女性会
ヒルズワークス徳重ガレージズ (株)鯉城会
豊田システムズ社会貢献推進室 (株)NEAR
(株)安納スイツファーム農業生産法人
カープス大府勤分前店ピエゴ清水山店
(株)少年画報社ヤングキング BULL 編集部
三菱商事(株)中部支社 日本ゼネラルフード(株)
名古屋南ライオンズクラブ (株)トーハン
豊通フアイティングリーグス(株) 一步の会
名古屋南ロータリークラブ KEIZO 大高
マニライフ生命保険(株)名古屋支社 圓道寺
愛知県社会福祉協議会 (株)ジェイ・ストーム
霊友会「ありがとうこだま基金」 鳴海教会
大高学区民生児童委員協議会 (株)エコ・ポリス
(株)エスティケー (株)井上紙店 (株)アジャスト
サンスイサービス(株) 日本システム開発(株)
大高南秋祭り ゆうりんフェスティバル
グレース・トゥルースチャーチ 勝鬨寺
名古屋商工会議所・守山商工会・鳴海商工会・有松商工会 富士ダイス(株) 宗教法人カトリック
聖マリア在俗会 (株)ユーリカ基金 KIP
NPO 法人日本ホスピタル・クラウン協会
(株)木曾路じゅんじゅん亭 (株)トヨタシステムズ
熱田神宮庁 名古屋中法人会錦三丁目支部
日産労連愛知地方協議会 (株)大橋製作所
中日本興業株式会社名古屋観光ホテル
中部楽器技術専門学校 (株)名工建設
中央有鄰学院ひとりひとりを支える会

ゆうりん山小屋(仮称) 建設に伴う寄付のお願い



皆様におかれましては、日頃から社会福祉法人中央有鄰学院に對しまして多大なるご支援ご協力を頂き職員一同厚くお礼申し上げます。

さて3年前に、岐阜県郡上市にあります別荘地「ニューパークひるがの」内に別荘用地の寄贈の申出を頂き、この申出をお受けしました。寄贈を申出て頂いた方に心からお礼申し上げます。

この用地を有効に利用させて頂くため、この3年間法人内で幾度と検討した結果、親元から離れ施設での生活を余儀なくしている子どもたちの心身の安らぎや、健康増進のため、卒院していった子どもたちの集いの場として、また学院に對しての支援者、地域の方々や職員の保養施設などとして幅広く利用して頂くために仮称「ゆうりん山小屋」を建設することとなりました。別荘地は標高900メートル地点にあり、夏は避暑や川遊び、冬はスキー場や温泉等があり、すばらしい環境にあります。

そして建設に当たっては具体的な設計施工などが具体的に進んでおり、2021年2月頃には完成予定です。しかし、この建設に当たっては多額な建設費が必要となり、皆様ご寄付をお願いすることとしました。

何とぞ、この建設の趣旨をご理解頂き、ご協力をいただけたらと思います。どうぞよろしくお願い致します。

理事長 那須野康成

COLUMN

嘘をつくことはいけないということは、誰しも十分に分かっていることだと思いが、一度も嘘をついたことがないという人は、なかなかいないんじゃないでしょうか。

また、子どもの嘘に對して、「絶対に許さない」と決めつけないという心を得ておくことは大切なことのように思います。

なぜなら、子どものつく嘘は、大人が嘘をつかせていると言い換えることもできるからです。私たちが大人は、子どもが嘘をつかなくて良いような、常日頃から安心して何でも言えるような環境を作ること、本当は言いたくないような嘘を防ぐこともできます。子ども自身が「大人はどんなことでもちゃんと受け止めてくれる」と感じていれば、それほど「嘘をつかなきゃ…」という気にはならないはず。

子どもが嘘をついたときは、嘘はいけないと教えると同時に、「嘘をつかせてしまった」という大人の側の自覚も同時に必要だと感じています。

